

## 「岐阜県データ活用講座」の実践 ～学校現場のニーズに応じた教材の提供～

発表者名 清水浩二 (岐阜県総合企画部統計課 課長補佐)

大坪辰也 (岐阜県総合企画部統計課 課長補佐)

連絡先 〒 500-8570 岐阜県岐阜市藪田南2-1-1

Tel: 058-272-1111 (内線2083) Fax: 058-271-5720

E-mail: [c11111@pref.gifu.lg.jp](mailto:c11111@pref.gifu.lg.jp)

### 1. はじめに

平成 23 年度にスタートした学校現場への出前授業「岐阜県データ活用講座」はこれまでのべ 33 校 (小学校 5、中学校 22、高校 1、大学 5)、約 3000 人の児童生徒らを対象に実施してきた。(H23:9 校 855 人、H24:12 校 955 人、H25(H26.1 月): 12 校 1166 人)

統計は利用されてこそ価値がある。データ提供を担う統計課はHPの充実等の利用環境の整備に加え、統計に対する理解や関心を深める普及啓発も重要であり、調査環境の改善には欠かせない。ビジネス等の利用者はもちろん、児童生徒は学習や研究等を通じた統計の利用者であり、将来は社会人として、利用者或いは統計調査への協力者となる人々であり、統計の普及啓発を進める重要な対象である。

この事業は次代を担う若い世代に、統計に慣れ親しみ、データの分析・活用の実践やデータからみだふるさと岐阜県の特徴やじまん等について学ぶ機会を提供することを目的とし進めてきた。これまでの蓄積から、岐阜県では次の二つの基本型を柱に出前授業を構成している。

#### 基本型 1 「データをグラフに表し傾向を読み取る」

人口の推移、特徴ある産業・特産品など地域にまつわるデータ、視力や真夏日数の推移など身近なデータを題材に体験型の学習を実施。統計課が用意したデータ・作業しやすいグラフ作成シートを生徒に配布し、職員がアドバイスしながら、実際にグラフ作成を行い、完成したグラフを分析し読み取った傾向や特徴をまとめ、発表を行う。

#### 基本型 2 「データからふるさとを知る」

データ活用の実例として、森林率全国 2 位、水力エネルギー量全国 1 位、岐阜のモノづくり産業や農林畜産物など、ふるさと岐阜県や地域の特徴・強みを、グラフ等を用いてわかりやすく解説。授業のまとめとして、データから学んだふるさとのじまん等をアピールするキャッチコピーを生徒らが作成し発表を行う。

これまでの取り組みを通じ、学校現場からは、実際の統計データ、特に生徒の興味を高める身近なデータを用いて、「資料の活用」分野の指導内容 (平均、ちらばり、最大・最小値、最頻値) を解説した資料や教材がほしいとの声があった。今年度はこうしたニーズに応えるため、基本型 1 の新たな試みとして、身近なデータを題材にその代表値や散らばりについて学ぶ授業の開発に取り組んできた。未だ十分なものではないが、ひとつのたたき台として、本稿では、今年度の取り組みの具体的内容や生徒の声、学校現場の評価等を、担当者個人の意見を交えながらご紹介したい。

### 2. 授業構成のコンセプト

授業内容は以下をコンセプトに検討を進めた。

- ① 公的統計から身近なデータを取り上げる
- ② 一コマ 50 分間で完結できるデータ量とする
- ③ グラフ作成等データを可視化する体験を組み込む
- ④ 代表値の算出だけでなく、代表値を使った分析結果の発表を組み込む

このコンセプトは、基本型 1 「データをグラフに表し傾向を読み取る」が目指す姿と一致する。しかしながら、データの選択には悩んだ。工業統計をはじめとした経済関係データはトップシェアや特産品ランキング等は興味を引くが、産業構成等ははまだ働いていない児童生徒らにとっては生活実感が伴わず馴染みが薄い面もある。また、世帯の平均貯蓄残高や世帯年収のデータ分布もよい事例であるが避けた方が無難といった場合もありうるし、視力や身長など身体に関するものは配慮を要する場合もある。結果、今年度は、小売物価統計調査による「身近な食材の価格」と国勢調査による「47 都道府県の人口」を選んだ。

なお、我々は「統計は難しいというイメージを払拭し、慣れ親しみ楽しく学ぶ」を原則に進めており、親

しみやすいクイズを入れることや、一方的な解説とせが積極的に参加する仕組みとするなど工夫を重ねており、今回「楽しく学ぶ」を第一に授業を構成した。

### 3. 実践事例①「身近な食材の価格を調べる」

#### 実践例1…関市立武儀中学校（2, 3年生）他2校

この事例は小売物価統計調査から、夕食の献立等をイメージして、牛肉、しょうが、お米、きゅうり、トマト、さんまを選び（ある程度、旬の価格の値動きがわかる、正規分布に近い等を考慮）、平成24年中の毎月の価格の傾向を分析し、どんなことがわかったか発表することを流れとして構成した。

この事例の課題として、値動きには複雑な要因もあるし、代表値やヒストグラムを扱うにはデータ数が少ないことも承知だが、敢えて取り上げたのは、毎月ならばデータ数は12であり一コマで扱いやすい、例えば平均を計算する場合でも12個の合計なので作業しやすい、食材なら生徒の金銭感覚でも理解しやすい等による。何より食べ物ならば、詳しい説明も不要で、関心を引きやすい。まずは使うことが大事で、データ量に抵抗を感じさせず身近なデータとして適切と考えた。

実際の授業ではきっかけとして、生徒の好きな食べ物を聞いたり、バーベキューやカレーにはどんな食材を買うか等やり取りを重ねながら入り、調べる食材を示し実際の価格を調べていこうと進めた。

続いて、次のステップ表を配布し、作業手順を明確に示し、学習内容を説明した。

生徒に配布した資料1: 班単位の作業内容を明確にする「STEP表」を配布

#### STEP表 班で協力して値段について、調べを進めます。

- 作業1 ●1～12月までの価格の推移を折線グラフに表す。
- 作業2 ●ランキング表をもとに、次の値を求める。  
 ①最も値段の高い月、最も値段の安い月、及びその価格差。(最大値、最小値、範囲)  
 ②ランキング表をもとに真ん中の値を求める。(中央値)  
 ③値段の平均を求める。(平均値)
- 作業3 ●ランキング表をもとに、度数分布表を作成し、ヒストグラムに表す。  
 ①ヒストグラムから、一番多い値段の階級を見つける。(最頻値)  
 ②平均値、中央値、最頻値はヒストグラムで、どの位置にあるのか矢印で示す。

発表 これまで作業して分析した結果をもとに、班で話し合い、わかったことを発表。  
 <話し合いの観点>  
 ・値段の安い(高い)時期はいつなのか。  
 ・最も値段の高い月と最も値段の安い月の差はどれくらいなのだろう。  
 ・値段の変化は少なく、おおよそ同じくらいなのだろうか。  
 ・値段の動きについて、作物の収穫時期、食材の「旬」なども合わせて、要因を考えてみよう。

さらに、各食材のデータシートとグラフシート様式を配布し、生徒達は作業に入った。生徒達の作業中は適宜職員がアドバイスに入り、進行管理を行い、終了後生徒は発表を行った。



生徒に配布した資料2: 価格表、ランキング表、度数分布表の様式を配布(「トマト」を例に)

**トマトの価格(1kg・中程度のトマト(150g)約6個分)**

【岐阜市の平成24年の月ごとの小売価格(単位:円)】

月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
価格	617	592	721	788	604	572	516	479	593	670	619	620

・データ数が12個なので、使いやすい。  
 ・食べ物の価格なので馴染みやすい。  
 ・定義の説明が不要。

**ランキング表**

順位	月	価格
1	8月	479
2	7月	516
3	6月	572
4	2月	592
5	9月	593
6	5月	604
7	1月	617
8	11月	619
9	12月	620
10	10月	670
11	3月	721
12	4月	788

出典: 岐阜県統計局「小売物価統計年報 平成24年」

・ランキング表から読み取るので、最大、最小、中央値もすぐわかる。  
 ・平均は、電卓で算出。

・ランキング表があれば、度数分布表が作りやすい。  
 ・生徒が戸惑うことはなかった。

**度数分布表**

価格(円)	個数(度数)
以上 未満	
300 ~ 400	
400 ~ 500	
500 ~ 600	
600 ~ 700	
700 ~ 800	
800 ~ 900	

生徒に配布した資料3: グラフの様式

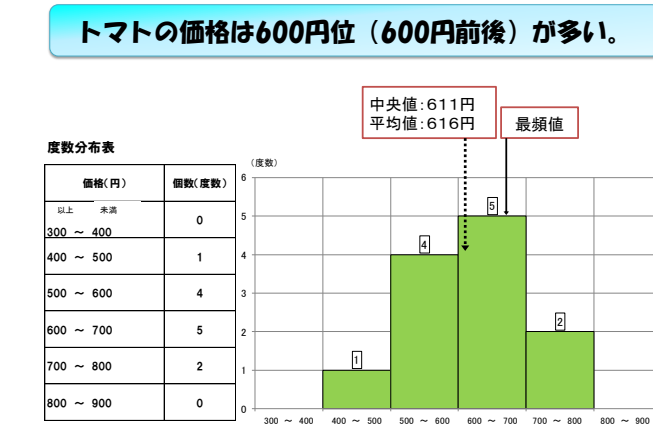
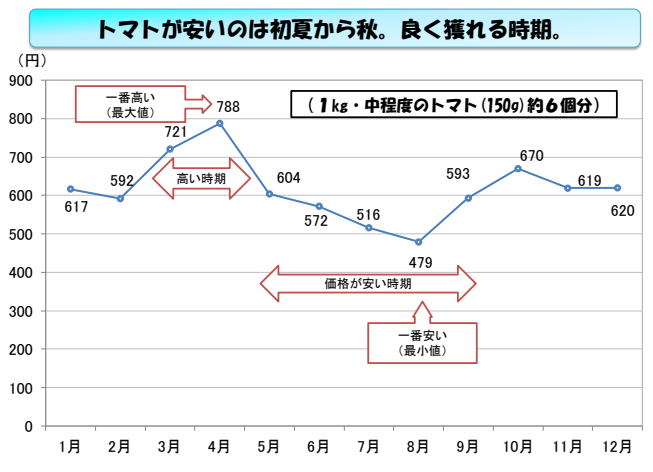
・大まかに、概数で目盛をとって、プロットするよう、アドバイスしながら進めた。  
 ・自分で作成したグラフであるため、グラフの示す傾向等を読み取りやすい。

・データ数が少なく、グラフ作成は容易。  
 ・データの分布状況をわかりやすく示す必要があるため、階級の幅の設定に気を配った。  
 ・自分で作成しているため、生徒は読み取りやすい。

**トマトの価格の推移**

**トマトの値段のヒストグラム**

トマトを例にすると、作業したグラフ・発表は次のようにまとめられた。



授業を受けた生徒達の主な発表・感想をみると、

- 折れ線グラフに表すと、トマトときゅうりの値段が同じような動きをしている。旬が夏だからと思う。
- さんまの値動きを折れ線グラフで見ると変動があると思ったけれど、ヒストグラムで見ると70円前後で売られていることが多く、一番高い値段と安い値段の差(範囲)は17円と、年を通してそんなに変わらないことがわかった。
- 普段食べている食べ物の値段が月によって差があることを初めて知った。折れ線グラフに表すと高い時期や安い時期がはっきりとわかった。ヒストグラムではどれくらいの値段で売られているかひと目ではっきりわかった。



であり、データをグラフで表し可視化するメリット、代表値やヒストグラムを使うことでデータが示す傾向や特徴を読み取りやすく説明しやすくなること等を実感できたものと考えている。

また、現場の先生からは、

- 素材が身近な食べ物なので取り掛かりやすい。
- データ数12個なので、グラフ作成、並べ替え、他の食材との比較等作業が容易。また12か月分なので1年の流れとして価格を考えることができる。
- 数学で学んだ折れ線グラフやヒストグラム等の処理能力を使って解決できる問題である。
- ねらいである「食べ物の値段を調べる」について、その調べ方として、折れ線グラフ、平均値、中央値、ヒストグラム等を使うということが生徒にもはっきりと伝わっていた。
- 「STEP表」は学習内容がきちんと表現されている進行表であり利用しやすい。これさえあれば、ほぼ一人でも進めることができる。
- ヒストグラムに加え折れ線グラフも活用することで、グラフを読み取る力を育てるのに役立つ。また、小学校までに得た知識との系統性もある。
- ヒストグラムに平均値や中央値や最頻値を示す操作により「資料の活用」の復習となる素材である。

等ありがたい感想をいただいた。「限られた時間内」で、複数のグラフを作成・代表値を用いて整理し、様々な要素を組み合わせでデータの傾向を読み取り発表するという一連の流れを体験すると言う意味では、参考事例となると思う。

なお、この授業は食にちなんだものであるため、家計調査等の結果から、岐阜県民は外食・喫茶店が大好き、各都道府県民の好きな食べ物クイズなど、統計からわかる面白さも話題にしている。生徒達の反応もとても良く、県としては統計をアピールする活用事例の一つとして有効と考えている。

## 岐阜県民はこんなことが大好き

資料:総務省「家計調査」都道府県庁所在地別ランキング(H22~H24平均)  
(二人以上の世帯の1世帯あたり年間実支出金額・購入数量)

### ★外食が大好き



・和食(外食)消費金額	44,792円	多い方から全国1位!
・洋食(外食)消費金額	28,602円	多い方から全国2位!
・中華食(外食)消費金額	9,330円	多い方から全国1位!
・すし(外食)消費金額	19,293円	多い方から全国1位!



### ★全国一喫茶店が大好き

・人口千人当たりの飲食店の数(居酒屋等を除く)  
4.05店 多い方から全国1位! H24経済センサス



・1年間の喫茶代	11,874円	多い方から全国2位! (H21~H23平均では1位)
(H21全国消費実態調査からみても、1ヶ月の喫茶代974円⇒全国1位!)		
・人口千人当たりの喫茶店の数	1.47店	多い方から全国2位! H24経済センサス

### ★岐阜の名産、ハムと柿も大好き



ハム	
購入量	: 全国2位
購入金額	: 全国5位



柿(かき)	
購入量	: 全国1位
購入金額	: 全国1位

### ★行動的な県民性

・ボランティア活動の年間行動者率 32.8% 高い方から7位  
・旅行・行楽の年間行動者率 74.6% 高い方から11位  
・趣味・娯楽の年間行動者率 83.8% 高い方から21位  
資料: H23社会生活基本調査

## 4. 実践事例①の課題等

事例①は、代表値やヒストグラムを扱うにはデータ数が少ないのがデメリットである。

これを補うため、分析を複数年とする、対象地域を拡大する等が考えられるが、データ数を増やすことにこだわりすぎると分析目的が不明確になってしまい適切ではない。この場合、データ数よりもむしろ、過去と比べ価格はどう変化しているのか、地域差はあるのかなど、小売物価統計調査からわかることを分析する方が本来の方向であろう。

事例①は「限られた時間内で簡易に代表値やヒストグラムを使うこと」に重点を置いた。そもそも、代表値は求めることが目的ではなく、分析に使うものである。今回の事例であれば価格の最大値と最小値を求めるのではなく、高いのは何月・安いのは何月、平均や最頻値もいくら位で売られているか、値動きの幅はどの位か、これらを知ることが代表値の意味であり、買い物時には知りたい情報の一つとも言えよう。データの分析は普段の生活とかけ離れたことではなく、物事の判断や意思決定等日常生活に深く関わっていることや、データから発見する面白さを知ることが目指すところであり、統計教育を広げることや統計に対する関心や理解を深めることに役立つと考える。

データ処理は難しいというイメージや負担感ばかり残っては、理解も進まない。課題はあるものの、一連の分析を簡易に体験できるという意味では、この事例は有効であると言える。



## 5. 実践事例②「岐阜県の人口は多い方が少ない方か」

### 実践例2…岐阜市立陽南中学校

この事例は国勢調査による各都道府県の人口を用いて、データの分析は平均値等だけでなくデータの偏り（ちらばり）等全体の傾向を捉える必要があることを実感する目的で構成した。

授業は導入として岐阜県の特徴等クイズを交えながら解説した後、「岐阜県の人口は全国47都道府県の中で多い方か少ない方か？」との問いかけを行った。ちなみに、こうしたランキングはインパクトがあるため、生徒達の関心も高く、クイズにしても非常に反応がよい。とりわけ人口ランキングはわかりやすいせいか、特に反応がよい。

生徒達には、岐阜県の人口は「多い方」「少ない方」「わからない」で挙手してもらい、実際にデータを分析し答えを確かめていく方向で進めた。まずは、作業しやすいよう100万人単位の概数で端数処理した北海道から沖縄まで順に並べた都道府県人口一覧を配布した。なお、データ数47と一コマで処理するには多めであるため、あらかじめ多い順に並べたランキング表も配布した。

作業の流れは、

- ①平均値を求める（平均より多いか少ないか）
- ②ランキングで順位を調べる（最大・最小、真ん中はどこか）
- ③度数分布表に整理しヒストグラムを作成分析する（人口何万人位の県が多いのか、岐阜県はそれより多いのか少ないのか）

である。ただし、③では作業負担が重くなって分析時間がなくなってしまうことがないように、敢えてヒストグラムの一部を書き込んだワークシートも配布した。

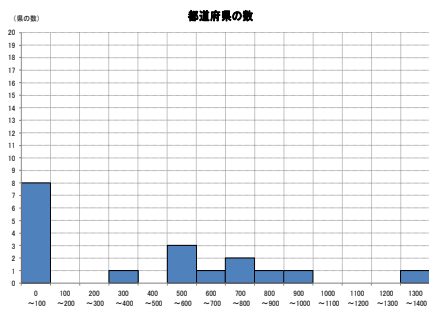
生徒に配布した資料（都道府県人口は100万単位の概数に整理したランキング表を提示）

(ア) 都道府県の県数を、100万人ごとに区切って数えよう。(度数分布表を完成する)

人口[万人]	都道府県の数
以上 未満	
1300~1400	
1200~1300	
1100~1200	
1000~1100	
900~1000	
800~900	
700~800	
600~700	
500~600	
400~500	
300~400	
200~300	
100~200	
0~100	
合計	

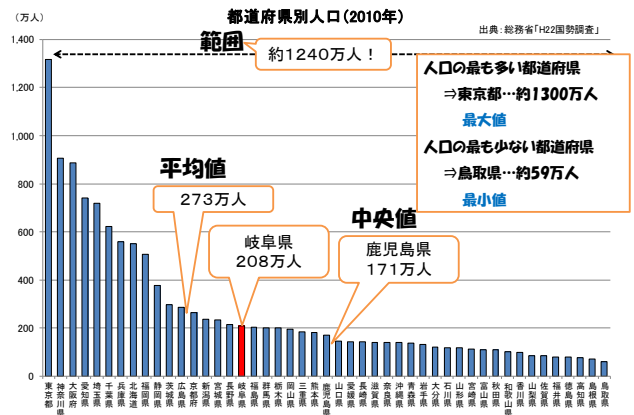
出典: 総務省「H22国勢調査」

(イ) ヒストグラムを完成しよう。



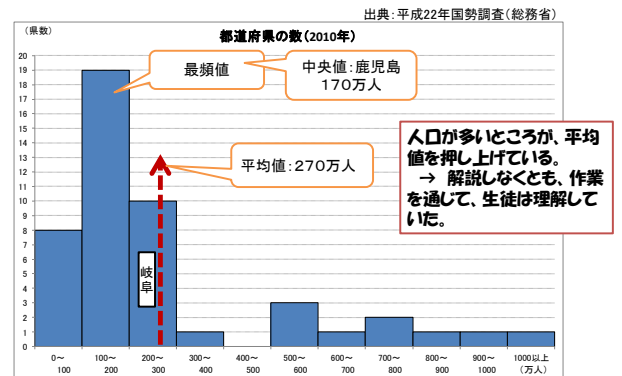
がほとんどだが、この授業では自ら問いの答えを確かめるため個人単位で実施した。

①の作業からは、岐阜県の人口208万人は平均273万人より少ないことがわかる。しかし、②の作業から、ランキングをみると岐阜県は多い方から17位。真ん中である中央値(24位・171万人)よりも上位に位置しており、これら代表値だけでは判断しにくい結果となった。



そこで、③の作業「ヒストグラム」からデータの散らばりを分析して、わかったことを発表してもらうことにした。

都道府県の数のヒストグラム(階級の幅を100万人とする)



生徒からは「岐阜県の人口は平均よりは少ないが、真ん中の値よりは多く、ヒストグラムをみると、最も度数が多い階級(最頻値)よりも、岐阜県は上位の階級にある。よって、岐阜県は人口が多い方の県と言える。」との発表があった。このほか、

- ・「平均」はヒストグラムで一番度数が多いところと思っていたが、平均は273万人と、一つ上の階級にずれていた。これは1300万人の東京都が平均を上げていると直感した。
- ・ランキング表を使って、人口100万人ごとの度数分布表を見たら、人口100万人台が19県と多いことがわかった。また、ヒストグラムに表すと、300万人以下に偏っていることもすぐにわかるので便利だと感じた。

以上の準備もあり、生徒達の作業は戸惑うことなく進んだ。我々の行う授業では班別で体験学習を行うこと

- ・順番に並べた真ん中の値と平均の値は同じ位と思っていたが、今回のヒストグラムの様に平均値と中央値が離れている場合もあることがわかった。



との声が聞かれた。何とか、授業の意図したところは読み取ってくれていたと考えている。

なお、現場の先生からは

- ・数学の指導内容（平均、ちらばり、最大・最小値、度数分布やヒストグラム）を網羅しており、素材として十分に使用できる。
- ・階級の幅を50万人や200万人単位に変えるなどの作業を行うとより100万人区切りのグラフの見えやすさが理解できる。
- ・平均値や中央値での比較やヒストグラムを使うことなど、まとめの授業として有効。

といった声をいただいた。平均値と中央値のズレやデータの偏り等を実際の統計を用いて解説する有効な事例と考えている。

県としては、最も重要な調査である国勢調査を教科書の内容にマッチした教材に活用したよい事例であり、新たな使い道を示した統計PR資料としても役立つと考えている。

## 6. 実践事例②の課題等

我々の出前授業では人口を多く取り上げているが、それは全国・都道府県・市町村・小地域まで必ず入手可能であり過去のデータも揃っていること、人口ピラミッド等男女・年齢別分布等も分析出来ることによる。また、人の数なので定義の説明も不要であり、生徒も議論しやすいという利点がある。

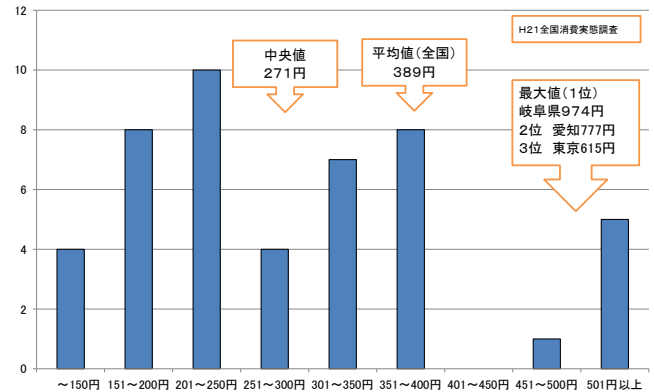
これまでの授業例で、人口ピラミッドの作成体験や読み取りを多く実施してきたが、生徒達は自分達の世代や比較的人口が多い親世代の人口に注目する等して観察を進め、少子化の進行や高齢者の増加など人口構成の変化や、人口減少の要因・時代背景等を話し合う姿が見られた。人口ピラミッドの観察は小学校でも実施したが、児童もよく理解しており、人口を手掛かりに地域・社会について勉強する素材としてもっと活用いただきたいと思う。さらには、同規模の過去や他の地域の人口と比べ、公表されている平均年齢や中央値なども示し、男女・年齢分布の違いを読み取るといっ

た発展的な内容もありうると思う。なお、毎年大学でも講座を実施しているが、人口減少を知らない大学生も多く、社会を知る上で必要な知識として人口データをさらに活用してほしいと思う。

人口データのほかにも、データの散らばりを観察でき身近な素材はないかと探したところ、「全国消費実態調査」による一世帯当たりの喫茶代があり、今後活用したいと考えている。なお、H21調査で岐阜県は1位であり、喫茶店のモーニングが豪華であることでも有名な地域である。

目的にマッチしたデータを探し出すのが大変なことは事実だが、これら身近なデータをストックし提供していきたいと考えている。

各都道府県 1カ月の喫茶代のヒストグラム(二人以上世帯)



## 7. その他今年度の取り組み

今年度は小学校からの依頼が増加したことが印象的であり、そのリクエストは基本型2「データからふるさとを知る」であった。岐阜県の自然、人口、産業などの特徴や、その学校がある地域の自慢等についてデータで裏付けて解説し、漠然と知っていた地域の自慢を改めて実感できるようにした。もちろん一方的な解説とせず、様々な統計クイズを交えながら、楽しく学ぶ時間とした。授業の総括として、感想を発表したり、勉強したふるさとの強みや自慢をキャッチコピーにまとめ発表した。これらを通じ、改めて地元への理解が深まったと感じている。

なお、この基本型2は小学校に限らず、中学校からのリクエストも多く、データから地域を知ることは関心が高い内容であることは間違いない。

県としては、データからふるさとの良さ・じまんを見つめ直し、地域への愛着を深めてもらう機会（ふるさと教育）に役立つ事業としており、出前授業では解説時間は調整しつつも、必ず取り入れるよう配慮している。

## 8. まとめ

これまでの取り組みを振り返ると、

- ①地域、生活に身近なデータを扱う
- ②データ分析の基本である「グラフ作成体験」は数字を視覚化するメリットを実感でき有効
- ③グラフ中心にわかりやすく視覚的に見せる
- ④まとめとして発表を取り入れる

といった点で学校現場から高い評価を受けている。数学で「資料の活用」を学ぶ導入やまとめの機会や、データを用いた学び方や地域への理解が深めるものとして社会科や総合的な学習の時間等にも有効との声もいただいている。授業に用いた資料も学校で大いに活用できる教材であると有り難い意見をもらっている。おかげさまで、毎年実施したいとの定番校も増えている。

県としては、県政PR・統計をアピールするよい機会を得たこと、統計について解説するノウハウが蓄積されたこと等が成果であるが、組織として継続するには無理のない仕組みも重要である。その一つとして、授業に出向くだけでなく、学校現場が自由に活用出来る統計の教材を容易に入手可能な形で提供していくことを進めるべきと考えている。これは、学校に限らず多くの方々が統計を活用する素材としても役立つ。

その一環として、今年度、岐阜県統計課ホームページのリニューアルを行った。実は、統計課ホームページは県庁ホームページでも閲覧件数が常に、上位にランクインするページである。皆様にご協力いただいた調査結果をわかりやすく還元するために、探したいデータへアクセスしやすいよう構成を見直した。このリニューアルに合わせ「統計からみた岐阜県・市町村の現状」を更新した。これは、県・市町村毎に人口・世帯、産業等の基礎データをグラフ中心に解説したスライドであり、コンパクトに地域の現状がわかる資料として、行政だけでなく研究者、報道機関はじめ多くの方々に利用されている。学校関係者にも好評で、授業や社会科等の副読本の基礎資料としても活用いただいております。今後も誰もが使いやすい形で教材を提供したいと考えている。

すでにデータ活用講座のページでは、これまで授業で使用した資料の一部を公開しており、今年度の開発した授業の資料や、クイズ形式でデータから見た岐阜県の特徴や自慢を学ぶ資料といったものも、順次公開に向けて作業を進める予定である。

学校現場の声として、統計教育に関しての指導方法を求めると言うより、児童生徒の興味を高めるため、統計データを活用した教材を提供してほしいとのニ

ーズが高い。数学「資料の活用」であれば、指導内容（平均、ちらばり、最大・最小値、最頻値）について、サンプルデータではなく、実際の統計データを用いた教材を提供してほしいとの声が強いの。実のところ、慣れていないと教材作成に適したデータを探し出すのはなかなか難しいので、授業に利用しやすい問題レベルで色々なパターンの教材を提供してほしいとの声が聞かれている。

最近では統計への関心が高まっており、統計教育も日本統計学会、総務省等でも熱心に取り組まれ、本県を含め県レベルの取り組みも増えてきている。こうした統計関係者がそれぞれの分野で力を発揮し、ニーズが高い教材の提供を進めていくことが、統計教育を広め、統計調査に対する理解を深めることに有効であろう。

「統計は難しい」というイメージは根強い。統計教育についても、データ提供を担う統計課としては「難しい」イメージを払拭することが第一である。まずはきっかけとして「データは社会の様々な姿がわかるから面白い」と実感することが大事で、それこそが統計への関心や理解を深めるといった目的にかなっていると考える。児童生徒らに対しても、統計への興味を引くことが学習意欲を高め、ひいては将来を担う有益な人材の育成につながると思う。仕方なく統計を勉強するのではなく、データは面白いと気づかせることが、我々の目指す出前授業の一番の狙いと言える。

だからこそ、興味を持たせるためにはわかりやすさが大事であるが、この取り組みを通じて感じるの「わかりやすく伝える」ことの難しさである。納得のいく水準に到達することはなかなか困難な道ではあるが、多くの方々の反応や声を確かめながら、わかりやすい伝え方を日々研鑽しなくてはならないと考える次第である。

最後に、この取り組みは、受け入れて下さった学校関係者や、統計課上司の方々のご理解、統計課の岩井隆史課長補佐、久野雄司課長補佐、企画分析係の溝口晃洋主任、堀田一峰主事、安藤和久主事、三浦万里子さん、皆さんのチームワークに支えられてきた。この場をお借りして、皆さんに心から感謝申し上げます。